

## 第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

カテゴリー	ランチョンセミナー 一般演題口演(優秀演題)
タイトル	神経難病患者のコミュニケーション機器支援の現状と支援者育成の取組み
日時	平成 25 年 3 月 31 日 13 : 00~13 : 10
会場	第 6 会議室
座長	城西神経内科クリニック・石垣泰則先生
演者	医療法人拓海会 神経内科クリニック 大城克彦先生
企画趣旨	<p>【目的】筋萎縮性側索硬化症(ALS)等の神経難病患者に対するコミュニケーション支援は重要である。特に、意思伝達装置を使用する ALS 患者に対する支援はその特殊性も影響し人材不足が指摘され、支援者育成を目的とした研修が保健所や大阪府難病医療情報センターなどの主催で随時開催されている。研修では、当院における意思伝達装置を使用する ALS 患者に対する支援内容から支援者に求められる資質を検証し、研修プログラム内容を検討・考察した。また、大阪府内における必要人数を推定し研修へ反映させる取組みについて提示する。</p> <p>【方法】平成 23 年 4 月から平成 24 年 3 月にレスパイト入院した患者 117 人のうち、意思伝達装置を使用した ALS 患者 19 人に対して実施した支援内容についてカルテのレビューを行った。</p> <p>【結果】支援内容(複数回答)は次の通りであった。①入力装置フィッティング 19 人、②定型句の登録 11 人、③スキヤニング速度調整 11 人、④機器不調対応 10 人、⑤機器の使用法説明 9 人、⑥画面編集 9 人である。支援内容は、身体・認知機能症状の進行に伴う諸問題に対するが多くを占めており、支援は機器の導入から継続的におこなわれる必用性が示唆された。また日々のスイッチ・フィッティングを行う介護者への指導も重要な役割の一つと考えられた。</p> <p>【考察】支援者には意思伝達装置に使用されるパソコン及び呼鈴分岐装置などの各種周辺機器に対する知識に加え、言語・認知・身体機能評価をはじめ疾患への理解が要求される。大阪府内で意思伝達装置を使用する患者は 120 人(大阪府難病医療情報センター 2010 年調べ)であり、支援者 1 人が約 20 人担当すれば府内 6~7 人配置されることでサポート体制は充実すると推測される。この結果を受け、コミュニケーション支援者育成を目的とした研修について、その取組みを提示する。</p>